

University Academic Repository

今、なぜ論語か：大学教育の現状から
(100周年記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古閑, 博美, コガ, ヒロミ, Koga, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/84

今、なぜ論語か

—大学教育の現状から—

古 閑 博 美

要 約

今また、論語が注目されようとしている。それは、「心の乱世」と呼ばれる現状があることと無縁ではない。社会や教育の荒廃は、人びとの行動や精神に悪影響をおよぼし、取返しのつかない状況を生む。大学教育の現場で、学生の学力低下や態度不良が指摘されるようになって久しい。社会人としてふさわしい態度を形成するうえで、徳行や礼が実行されない環境を放置してよいはずがない。歴史的経緯からも、論語は、日本にもたらされた当初から教育的価値の高い書物として活用されている。

古典に親しむ教育を検証し、かつて実行された日本のよき教育的指導のあり方を、再び学ぶ必要があると思われる。筆者の実践から、現代の大学生であっても、礼をともなった交誼のあり方に心地よさを感じている者が少なくないと断言できる。

政治経済・福祉・教育を取り巻く情勢は厳しい。少子化に歯止めが期待できない今日、大学の今後を決して楽観できるものではない。しかし、人間が作った社会である以上、人間がその現実を直視したうえで是正し、よりよいものにしていくしかない。論語に学ぶ意味も、まさにその点にあると思う。

キーワード

古典、論語、孔子、礼の重要性、心の乱世、徳育、大学教育、学力低下、精神のひ弱さ、魅力行動学、魅力行動

はじめに

『論語』は、孔子およびその弟子たちの言行録として知られている¹⁾。『論語』を手にするまでもなく、また、論語それ自体を知る知らないにかかわらず、私たちは日常、そこに述べられたことばを引用したり生活のさまざまな場面で活用したりしていることがある。時代とともに各人各様に読み継がれてきた論語だが、今また注目されようとしている。

それは、社会や教育の荒廃と無縁ではなかろう。大学人として、教育現場に存する悪しき

状況を見逃したり放置したりすることは、大学教育への不信を招くこととなる。それを防ぐためにも、徳行や礼の重要性を説く論語に学ぶ意味があると考ええる。

1. 人間学としての論語

孔子（前 551 ? ～前 479）が生きた時代は中国の春秋時代で、孔子とその弟子たちが残したことがまとめられたのは孔子の没後 100 年余り経ってからのことである。それは、孔子を直接に知る者が減り、そのことを正確に伝える必要性が高まったことおよび伝えようとする機運が盛り上がったためである。現在の『論語』二十篇のものは、漢の終わり頃の紀元前 1 世紀初め頃に編集されたものといわれる²⁾。

中国の古典である『論語』は、日本に、応神天皇の 16 年に渡来したと伝承され³⁾、それ以後、日本人の精神文化や行動に大きく影響を与えてきた。それだけでなく、アジアの古典、世界の古典として今日まで人びとに多大なる影響を与え続けている。まさに、人類にとって有数の古典の一つである。

石本道明氏は、『論語』は日本人の古典である。（中略）正確に表現すれば『日本人にとっても』古典であると言うべきかもしれない」と述べたうえで、天皇の勅命（「若し賢しき人有らば貢上れ。」『古事記』所収）により奉呈された『論語』十巻と『千字文』を、天皇が太子ウジノワキイラツコの教育に充てたことを紹介している⁴⁾。

歴史的経緯からも、論語は、日本にもたらされた当初から教育的価値の高い書物として活用されている。論語は、学問、宗教、あるいは処世訓としての観点から長く読み継がれてきた。そして、近代では、実業家で教育や福祉に貢献した渋沢栄一（1840 ～ 1931）が、算盤（経済活動）と論語を両輪としたことが知られている。それ以後、利を追求する経済人が、仁や礼、徳行を追求する論語を座右の書としてきたことはたびたび検証されてきている⁵⁾。筆者は、現代のビジネス教育に論語が果たす役割は少なくないと考ええる。

中野孝次氏は、著書『論語の智慧 50 章』（潮出版社。1998 年）のなかで「論語のふしぎさ」と題して、「今はさすがにそんな空気は日本から完全に地を掃ったようだが、わたしが少年期を送った昭和 10 年代にはまだ、論語は聖典だから読まねばならぬものという空気があった。それは、一人前の人間になるためには論語はぜひ読んでおかなければならぬという一種の強制感として、少年たちに作用した。」（p.1）と述べている。

吹野安氏（博士 [文学]。國學院大學名誉教授）は「心の乱世だからこそ、『論語』を必須の教養書とすべきだろう。小学生から読ませればよい」⁶⁾と述べ、城山三郎氏は、高杉良氏との対談で「（前略）このところ、日本は論語を忘れがちになっていたことは事実です。最近はずますます、論語がどこかに行ってしまう傾向がないでもない。これは憂うべきことです。先達に学ぶ。このテーマはいまこそ重要な意義を持ってきたのだ、ということを肝に銘じなければなりませんね。」と語っている⁷⁾。

このような声は、日本の現状と深く結びついている。今日、日本が、吹野博士が指摘する

「心の乱世」にあり、その事態に子どもからおとなまで巻き込まれていることを否定できる人はいないであろう。安全で平和な日本といわれたことも今は昔、犯罪は「3K2S1H」（凶悪化・巧妙化・国際化、組織化・スピード化、ハイテク化）⁹⁾と表現される。そのうえ、複雑化や低年齢化が進み、政治・経済活動および治安にたいする信頼の低下と悪化は目を覆うばかりである。

大学でも「3K2S1H」は容易に散見される。それらは、軽薄さ・緊張感の薄さ・コミュニケーションの未熟さ、私語・睡眠、覇気のなさなどである。大学に限らず、教育現場で、無作法な言動が横行しているとの報告や、新聞・雑誌などの記事は枚挙に遑がない。大学生の言動の幼稚さ、学力低下や精神のひ弱さは社会問題化しており、大学だけでなく社会全体の取り組みが問われている。

だが一方、大学や教員側にこういった事柄や態度に無関心なさまや、麻痺しているかのような姿がみられるとの指摘もある。それだけでなく、ハラスメント（嫌がらせ。自己の地位や立場を利用して相手を圧迫する行為）のひとつであるセクシュアル・ハラスメント（Sexual Harassment; 性的嫌がらせ。セクハラ）の加害者さえいて、学問の府の信用を失墜させているのは忌々しきことである。2002年度に、女子学生らにたいするセクハラで、懲戒処分を受けた国立大学の教授らは17名に上る（読売新聞平成15年6月11日付）。

礼は「人間社会における文化的法則」⁹⁾といわれるように、社会で、文化的法則が乱れれば、同様に文化的秩序も崩壊することになる。そうなれば、そこには、利己的な言動に終始するありさまや人間不信に陥る余地が生れる。これを、「心の乱世」と呼ばずしてなんと呼ぼう。

筆者は、魅力行動学¹⁰⁾の見地から論語に注目している。それは、「心の乱世」と呼ばれる時代認識と無縁ではない。論語が示唆する仁徳や礼の励行を、少なからぬ人びとが潜在的にも顕在的にも渴望していると考えられる。その背景として、社会には経済の悪化、犯罪の増加、利己的な自己（組織）を正当化する態度が横行していることへのやりきれなさなどの存在が挙げられる。また、個人の面からは、人間関係がうまく取り結べなかったり、何事にも達成感がない生活への閉塞感にとらわれたりしている状況がある。その結果、社会的にも個人的にも、他との軋轢を生じるなど、日常にストレスを募らせる人びとが増えていることが挙げられる。

人は常に身構えて生活しているわけではない。そのため、いきなりキレるなどの行動にたいして無防備であることも多い。常に、それらに適切に対処できるわけではないのである。「普通の人」と称される人でも、人は、いついかなる行動をとるかわからない…。そのような思いから、他人や社会にたいして、得体の知れない不安を抱いて生活している人たちは確実に増えているといえよう。社会にたいしてだけでなく、自分自身への漠然とした不安や自信喪失から、うつ病に罹っている若者の多さが一般雑誌の記事に取り上げられる時代である¹¹⁾。私たちは、誰であれ、緊張感をもって生活することを強いられる社会に住んでいることを否定できないのである。

精神的・行動的腐敗に満ちた社会では、馴れやあきらめという態度でしか行動できないという思いから、人びとに無力感や脱力感を招く一方、社会に少しでも秩序を取り戻し、生き易い社会であってほしいという潜在的かつ本能的願望を抱いている。このように、「心の乱世」と呼ばれる事態が生じていることが疑いようのない事実である今日においてこそ、論語への注目が喚起され、必要とされているのである。

日本は、戦後の奮闘努力の結果、経済復興を遂げ物質文明を謳歌するに至った。その反面、生活観や生活行動および精神生活上に大きな変化をもたらした。バブル崩壊後、長く深刻な経済不況が続いている。地位の如何や年齢・性別を問わず、不正行為や、突然キレて相手を傷つける行動、乱心したかのような行状が報道されない日はない。事件の残虐性や利己的な言動がもたらす結末の悲惨さに、心ある人たちは胸を痛めている。

論語は、特定の人びとにたいしてではなく、社会の多くの人たちにも影響を与えてきた。それは、そこに示された人間の生き方や考え方が、時代や階級を超えて人びとに強く訴える力を持っているからである。徳川家康（1542～1616）が政治的観点からも儒学者を重用したことは知られている。

日本は、18世紀後半には、初等教育の場や機関が充実し、庶民の間でも識字率が高く、日常生活に必要な教養を身につけようとする意識があった。なかでも、藩校や寺子屋における教育に論語が取り入れられたことにより、その思想や行動原理は、長年にわたり、日本人のあいだに広く浸透していった。五倫（君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友）の基本となる道徳を五常（仁・義・礼・智・信）といい、礼を尊び、徳行や忠恕の実践者たらんと切磋琢磨することにより、それが多くの日本人の指針となったのである。

現在、学校教育から漢文教育が遠ざかる傾向にある。旧制中学・高校で論語が必修であったときには論語にふれる機会はない。人間的成長は、誕生後の躰や教育・学習が大いにかかわっている。古典を、民族や人類の宝として、教育に大いに活用する意義を再考したい。そこで、古典を学ぶ重要性について考えてみたい。

2. 古典を学ぶ重要性

古典を取り上げることは、その当時にとどまらず、現代の社会を語り、文学・哲学や政治経済、人間を語ることにほかならない。論語は、古典および学術書として分析や批評の対象とされてきただけではない。それに触れることにより、みずからが社会にいかに存在し、社会や他者といかに関与しているかを考える問いかけの書としても受け止められてきた。知識や学問は、それを所有するものが、それらをどう生かすかによってその本来の輝きに差異が生じる。そのために、論語は、人倫の書としてリーダーにとっての必携、実務家の必読書とされてきた。

情報社会の今日、教育機関・企業・医療現場等で起きる不祥事は、早晩、白日の下に晒されよう。学校や、職業教育に倫理教育を導入することに疑いのない状況があるからこそ、論

語など古典に学ぶ意味がある。不祥事が起きないように監督・指導する側に、人びとの安全と平和、および人びとが正当に有する権利に配慮し守る意識が十全といえない姿があるとすれば、また何をかいわんや、である。

日本の教育史において、藩校や寺子屋での教育に論語の素読が取り入れられたことは無視できないことである。受講者は、なかでも子どもらは、意味もわからずに読み上げていたであろうが、「百読おのずからその意を解す」というように、孔子とその弟子たちが交わした会話や志、およびその教えは、心底の片隅に取り込まれていったことであろう。論語が、筋のとおり、あるいは、誠に満ちた言動を身につけるうえに大きく貢献した面を否定できない。そしてそれは、自分でも気づかないうちに、人生で遭遇するさまざまな出来事に対処するさいの指針であり、教えのひとつになっていたのである。

春秋時代、中国は戦乱下にあり、下克上の時代であった。そのような時代に生を受けた孔子は、復古（古きよき時代に学び、現代に活かす）と社会秩序の回復を唱導した。だが、自身が時の為政者に重用されることはなかった。その意味で、孔子は挫折を知る人であり、失意の人である。聖人と称せられる孔子だが、言行録のそこそこに人間性溢れる孔子を見出すことができるのもそのためであり、読者に親しみや共感を与えるのである¹²⁾。

儒教思想を過度の精神主義として嫌う向きがないわけではない。吹野博士は、講義のなかで「よい教えに学ぶことが大切なのであり、適当といえないものにまで諸々として従うのは古典を今日に活かす読解のありようとしてふさわしくない」と述べている。そこで、つぎに、主として明治初期の日本女性が、論語にどのように親しんでいたかをみることにする。

3. 論語を読む風景

日本で、漢文は男性の学問であり教養とした歴史は長く、近代まで続く。論語は男子の学問であっただけでなく、伝来の由来からも君子の学問とされた。とはいえ、女性が漢文に接することが皆無というわけではなかった。紫式部（973 頃～1014 頃）や清少納言（生没年未詳）の例を出すまでもなく、ある身分に属する女性や教養ある女性が漢文をたしなむことは、おおやけに、あるいはまた、ひそかになされてきたことである。論語を読む風景に男性優位は揺るがないが、日本に伝来したのちに男女を問わず徐々に広がっていったといえよう。

12 世紀になって武士階級が台頭すると、武士としての生き方やあり方を模索する必要が生まれた。そして、論語は、儒教の教典としてだけでなく、秩序回復や新しい価値を見出す拠り所としても、武家社会でますます重要な位置を占めるに至った。

孔子とその弟子たちの言行録である論語は、机上の学問をまとめたものではない。孔子自身が決まった師をもたず、その学問は独学を基調としているといわれる。戦国の世に生を受け、先人や習俗について学び、仁の思想や礼の実践を説いた孔子は、ある意味で現実離れた理想主義者とも称せられる。しかし、孔子は、周公治世の理想の実現をはかろうとする自己の行為に信念を持っており、言動はきわめて現実主義的かつ実践主義的思考に貫かれてい

る。後に、聖人と称されたが、すべてに完全無欠というわけではない。弟子たちの問いにたいし、言い訳めいたこともいつている¹³⁾。弟子たちを、それぞれの個性に応じて指導した¹⁴⁾という点で立派な教育者である¹⁵⁾。

中国で広く行われていた儒教教育に異変がみられるようになったのは、20世紀初頭のころである。礼の煩雑さなどをあげて、斉の景公が孔子を採用することに反対した晏嬰（晏平仲）の例にみるように、法家の儒家への批判は昔からあった。近代社会への脱皮をめざす中国で、儒教教育は旧態然としていて排斥された。諸外国の脅威や競争にさらされるなかで、近代的教育を模索する必要性が生まれ、創造的思考や先進的で合理的な行動が求められるようになったのである。

共産党政権下（1949年）に入ると、孔子はさらに批判され、中国の文化革命（1966～1977）においても同様であった。その理由の第一は、階級意識が濃厚にあるとみなされたからである¹⁶⁾。残された文言は一人歩きする運命にあるが、語録にはまた一方、今日的視点からみて平等主義や人道的見地に立っていると思われることばが随所にみられる¹⁷⁾。近代化・国際化を推進する中国で、近年、儒教や孔子の見直しがすすんでいるのは興味深い（朝日新聞平成14年12月25日付・平成15年5月25日付・平成15年5月31日付など）。

日本では、長い間、女性が学問を身につけることは歓迎されていなかった。その実態を『武家の女性』¹⁸⁾から引用してみよう。

水戸では、女に学問させると縁が遠くなるとか、また血筋をよそへ持つていかれるとかいって厭（いや）がりました。¹⁹⁾

父は経済学者だったにもかかわらず、女に学問はいらぬ、女は紺屋（こうや）の附け紙が書ければよいといってついに学問は教わらなかったと話しました。（佐々木延之の娘の話）²⁰⁾。

しかし、また、家の伝統によっては女性でも漢学を学び、漢学に長けた人がいた。それは、「藤田東湖の妹たちはみな仕込まれた様子で、武田耕雲の嫁となったいくが、元治の乱の後、入牢中、子供らに『論語』を教えた話も伝わっている云々」²¹⁾にみることができる。

『武家の女性』は、安政4（1857）年に水戸で生まれた青山千世（山川菊枝のご母堂）の思い出を中心とした女性の日常の記録である。千世は、9歳から11歳まで『孝経』『大学』『論語』を習っている²²⁾。

つぎに、少し長くなるが、明治6（1873）年に、新潟・長岡藩の家老の娘として生まれた杉本鉞子が著した『武士の娘』²³⁾から引用し（p.17～18）、学習することや学習時の態度を、当時の日本人がどのように身につけ実践していたかを紹介する。

当時、女の子が漢籍を学ぶということは、ごく稀なことでありましたので、私が勉強したものは男の子むきのものばかりでした。最初に学んだものは、四書——即ち大学、中庸、論語、孟子でした。

当時僅か六歳の私がこの難しい書物を理解できなかったことはいうまでもないことでございます。私の頭の中には、唯たくさんの言葉が一杯になっているばかりでした。もち

ろんこの言葉の蔭には立派な思想が秘められていたのですが、当時の私には何の意味もありませんでした。時に、なまなか判ったような気がして、お師匠さまに意味をお尋ね致しますと、先生はきまって、

「よく考えていれば、自然に言葉がほぐれて意味がわかってまいります」とか「百読^{おのずか}自ら其の意を解す」とかお答えになりました。ある時「まだまだ幼いのですから、この書の深い意味を理解しようとなさるのは分を超えます」とおっしゃいました。

正しくその通りだったわけですが、私は何故か勉強が好きでありました。何のわけも判らない言葉の中に、音楽にみるような韻律があり、易々と頁を進めてゆき、ついには、四書の大切な句をあれこれと暗誦したものでした。でも、こんなにして過ごした時は、決して無駄ではありませんでした。この年になるまでには、あの偉大な哲学者の思想は、あけぼのの空が白むにも似て、次第にその意味がのみこめるようになりました。時折り、よく覚えている句がふと心に浮び雲間をもれた日光の閃きにも似て、その意味がうなずけることもございました。

このお師匠さまは四書を教えて下さるにも、仏教を説く時と全く同じに、恭しい態度をもってせられ、肉体の安逸ということを一切避けておられました。辞退なさりながらも、教授の間だけは、女中のすすめたお座布団に坐っておられました。これというのも、師は弟子より一段上に席をとらねば、師弟両方とも礼をなみすることとされていたので、無理にお願いしていたわけでございます。お稽古の二時間のあいだ、お師匠さまは手と唇を動かす外は、身動き一つなさいませんでした。私もまた、畳の上に正しく坐ったまま、微動だもゆるされなかったものでございます。

唯一度、私が体を動かしたことがありました。丁度、お稽古の最中でした。どうしたわけでしたか、落ち着かなかったものですから、ほんの少し体を傾けて、曲げていた膝を一寸ゆるめたのです。すると、お師匠さまのお顔にかすかな驚きの表情が浮び、やがて静かに本を閉じ、きびしい態度ながら、やさしく「お嬢さま、そんな気持ちで勉強はできません。お部屋にひきとって、お考えになられた方がよいと存じます」とおっしゃいました。

恥しきの余り、私の小さい胸はつぶれるばかりでしたが、どうしてよろしいものやら判りませず、唯、うやうやしく床の間の孔子様の像にお辞儀をし、次いでお師匠さまにも頭を下げて、つつましくその部屋を退き、何時もお稽古が終ると父のところへゆくことにしていましたので、この時もそろそろと父の居間へ参りました。時間が早いので、父は驚きましたが、事情を知らないままに「おや、随分早くおすみだね」と申しましたが、きずついた私にはまるで死刑をつげる鐘の音のように響いたものでした。あの時のことを思い出しますと、今もお打ちぎずの痛みのように、私の心を刺すものがございます。勉強している間、体を楽にしないということは僧侶や師の慣わしでありましたので、一般の人々も身に受ける苦しみはかえって心のはげみになるものだと感ずるようになりま

した。

現代人は、忍耐や辛抱が苦手だといわれる。体格は格段に向上したが、体力は低下しているとの報告もある。苦しいことはいやだという思いは誰にもあり、楽をして世の中をわたりたいという気持ちを一方的に責めることはできない。まして、20 世紀は機械文明が進展し、あらゆる場面でその恩恵にあずかることがふえた。家事における肉体労働は減少し、一步外出すれば交通網の発達やエレベーターやエスカレーターなど便利な歩行援助の機材が設置され、誰彼といわず利用している。冷暖房完備の環境など人工的な環境整備も進んでいる。

だが、利器を安易に利用するだけの行動は、本来、人間が持つ能力を弱めたり後退させたりする面があることを承知しなければならない。不便を受け入れたり、忍耐し、辛抱したりする経験が人間を成長させるという視点は、教育的見地において忘れてはならないであろう。

『武士の娘』は、最初は英語で執筆されて、アメリカで出版された²⁴⁾。長くアメリカで生活し、コロンビア大学で日本文化史を講義した著者が、学生たちの多くの質問にこたえようと執筆したものである。学生や一般の読者のなかには、日本人が、おとなも子どもも、このように学問に取り組むことを知って感嘆し、敬意の念を抱くとともに、脅威を覚えた者もいたであろう。このような学問への取り組みや態度は、今の日本人が見失ってしまったものといえる。他に脅威を与える必要はないが、国際社会のなかで、その姿勢や行動のうえで一目置かれることもないような民族であってよいはずはあるまい。

4. 大学教育の現場に生かしたい論語の精神

大学生になっても、教科書も持たずノートも取らない者、教室できちんと着座できない者、授業の途中でトイレに行く者、携帯電話をかけている者、メールを打っている者や着帽したままであったり、飲食したり、私語がやまないといった状況が多くの大学で日常茶飯に見聞されている。筆者も、これまで何度かそのような状況について報告している²⁵⁾。こういった姿の出現は、戦後教育に猛省を促すものである。

平成 15 年大相撲初場所で、モンゴル出身の大関朝青龍（22 歳）が 2 度目の優勝を遂げた。優勝インタビューで、「お父さん、お母さんのお蔭です。国のためにがんばります」と答えていた。国の両親には電話で「勝つことができるのも丈夫な体で産み、育ててくれた両親のおかげです」（ママ）と感謝の気持ちを伝えている（読売新聞平成 15 年 1 月 26 日付）。優勝を決めた一番を終えた後、土俵下で目を固く閉じていた姿も思い出される。16 歳で日本に来て、相撲をはじめたときのことを思い出していたのだという。

父母への思いは篤く、「自分の力（だけ）でここまで来たんだ」という驕りはみられない。場所後に、横綱に昇進した。このような結果が出せたのは、勝負師として最高位を目指すという執念を抱き、四股・テッポウといった相撲の基本をおろそかにせずに取り組んできたからであろう。小柄な体躯に負けん気がみなぎり、立会いに向けて全身の細胞が燃え上がっていくさまが観客の興奮をよぶ。一般社会では、大学 4 年生に該当する年齢である。相撲をと

おして「心・気（技）・体」を極め、真の横綱として大成して欲しい。相撲社会が礼節を重んじることは知られている。相撲は、実力勝負の格闘技というだけでなく、確固たる「相撲道」の哲学と美学があるがゆえに神に奉納され、揺るぎない国技の地位を保つ。

筆者は、教壇に立って以来、授業の開始と終了時に挨拶を励行している。最初、立って挨拶することに不思議そうな、また大儀そうな態度をみせる学生も、次第にそれを受け入れるようになり、時間の経過とともに自発的かつ当然のこととして振舞うようになる。すると、教室に心地よい緊張や気持ちに締まりが出てくる。声を出して挨拶するようになると、心もいつそう近寄っていくようである。「礼に始まり、礼に終わる」というが、礼を失した人間関係や社会の状況は、人びとの精神や行動に異変を生じさせるといっても過言ではない。

何事も「自分のために」でいいのだとする教育からは、身勝手に利己的な人間しか生まれないであろう。自分のすることや、考えることが、社会や大勢の人に影響を与えることを考える能力を育成することが肝要である。そのことが、他の人や環境などに配慮する心力（心の力や働き）を涵養していくことになるのである。

「子曰、古之學者爲己、今之學者爲人。」（子曰はく、^{いにしえ}古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす、と。）²⁶⁾にみるように、学生にたいする嘆きは現代に限ったことではない。これは、「昔の学生は自分の修養のために学んだが、今の学生は人に認められたいがために学ぶ」という意味である。今なら、名を売らんとするほどの意気込みがあればよしということになるのかもしれない。

論語は、よく知られるように、学問の楽しさを語ることばかりはじまっている²⁷⁾。学生には学問する機会を喜び、大いに活用してもらいたい。だが、実際には、高校は全入、大学もふたりにひとりが進学する時代にあっては、勉強する機会が与えられていることにたいする感謝の念はそう強いとはいえない。それどころか、若者にとって進学は、もはや「当然」との意識がある。それだけに、中退や退学はかつてのような一大事ではなくなっている。また、現代の学生は、アルバイトに忙しく、勉強（思索や研究）が主たる本分であると心得る者は少ない。

進学にさいして、目的意識が希薄であるとか、やる気がないとかといって青少年を責めるだけでは解決しない。「子どもは親の姿をみて育つ」という諺もある。これは、親がどれほど子どもに手をかけ接触したかという回数をいうのではない。親が一所懸命にまじめに生きる姿を見て、自然と子どもが生きることの大切さを学び、道に外れることなく生きる力を感得していくさまをいうことばである。親だからといって、「育ててやった」という思いで接すれば、子は反発するだけであろう。

親だけでなく、教師も、その後姿を肅々と学生にみせていくことが大切である。そうすれば、その姿から、多少とも学生それぞれが本来の希望や任務に目覚めるであろう。他者を羨んだり嫉んだりする底の浅い人間になることもないはずである。また、将来を簡単に悲観したり、あきらめたりしたりして、いい加減に生きることなどできようはずはない。

しかし、筆者が接触する学生のなかには、そのことばや態度から、自分が進もうとする生き方への示唆が十分得られていないように思う。5年前だが、帰路の電車で一緒になった学生に話しかけると、「先生とこんなふうに話したことがない。高校時代、一度も先生と話したことがない。外で遇っても、声をかけるなどといわれていた」という。驚いて理由を聞くと、「女子高校生と話していると、援助交際と間違えられるからじゃないんですか」と答えたのに、二度びっくりしたことがある。そのとき、日本の教育は間違っていると実感した。

大学生は、生きるうえで、自分が納得できる目標が得られないことに、不安や自信のなさを抱えている。大学生という立場や年齢であるからこそ、悩んでいることも多い。その実情を知る近道として、たとえば、各大学に設置されている保健室や健康相談室、カウンセラー室などを訪れる学生の実態に目を向けてみるとよい。そこで出会う学生らは、親や教師、友人などに迎合したり言いなりになったりしているものが少なくない。そういう自分の小ささや弱さに情けなさを感じているのである。そして、自分を大きく、強くするための手掛かりを示してくれる人や出来事との出会いを願っているのである。

こういった学生と向き合うには、学内のさまざまな部署や人との連携が必要である。教員には、研究室に来る学生を忙しいなどといって拒否しない態度が不可欠である。時間が合わないときは、別に予約するなどの配慮をすればよい。勤務先の大学を含め、学生支援に広い視野から取り組もうとしている大学が増えてきている²⁸⁾。

大学に存在するのは日本人学生だけではない。今や、キャンパスに何か国語も飛び交う時代である。魯迅(1881～1936)の恩師、藤野巖九郎教授(仙台医学専門学校)は、魯迅の書いた『藤野先生』という短編小説で知られている。彼は、学生であった魯迅のノートを、朱で添削し続けたという。子弟の間には、民族や国境を超えた人間同士の触れ合いと交流があるのであり、そのことが私たちの胸を打つ。

人びとの行為は、みな互いに何かしら影響し合っている。ごまかししたり、言い訳したり、不正を恥じないなど、顔を背けたくなるような厚顔野卑のおとなたちこそが、青少年の不行跡を問いたす前に、みずからの襟を正すべきである。とはいっても、おとなたちの教育は青少年のそれより難しいのが現実だ。しかし、よりよい社会の実現を願うおとなや、青少年の同志を、ひとりでも多く得たい気持ちである。

日本人の教育にたいする真摯な態度は、戦後、移民として外国に渡った人びとの教育にたいする熱心な態度からも知られる。そして、それは、世界でも高く評価されてきた。戦後の高度経済成長期以降、学歴主義が偏向を強めるにしたがって、子どもたちのあいだにも、点数に一喜一憂する姿が生れた。その結果、人間教育の本質は置き去りにされていった感がある。答を出すことをせかされて成長する若者に、人としての根本原理をじっくり考える時間は与えられていない。人は、書物といわず、自然や自分以外の人から多くを学ぶことによって、正しく判断できる能力を養うのである²⁹⁾。

大学において、教育の場にふさわしくない学生が横行することを放置すべきではない。む

ろんそれを安易に排除すれば解決するとはいえない。教育は、人間としての基礎を作り、その後の人生を構築するのに貢献することである。大学教育は、社会に有意な人材を送る使命をどのように果たしていくかが問われているのであって、大学教育界全体が身を引き締めて取り組むべきことである。それは、教員の教育にたいする姿勢が問われることでもある。

おわりに

日本は、戦後の半世紀で、物質文明を謳歌する人びとが増えた。その半面、心根がゆがみ、行動の醜い人間も出現した。そしていま、経済の悪化はそのまま人心の荒廃につながっている。「心の乱世」というが、バブル崩壊後、そのツケが教育界にも突きつけられているのである。

孔子の弟子たちへの教育は個人にたいして配慮したものである。そのため、その教育の場に礼が不在ということはなかった。日本で論語が受け入れられ浸透する過程で、とくに江戸期以降、子女の教育に拡大して取り入れられていった。その理由は、生活に徳行を尊ぶ精神が存していたことや、礼とその実行の心が日本人の感性にピッタリと合ったこと、また、「鉄は熱いうちに打て」の教育的効果を熟知していたからである。

今日の世相をみるにつけて、かつて実行された日本のよき教育的指導のあり方を、再び学ぶ必要があると思われる。社会に有為な人材を送り出す責任を負う大学人のひとりとして研究を深めたい。筆者の実践から、現代の大学生であっても、礼をともなった交誼のあり方に心地よさを感じている者が少なくないと断言できる。

政治経済・福祉・教育を取り巻く情勢は厳しい。少子化に歯止めが期待できない今日、大学の今後を決して楽観できるものではない。しかし、人間が作った社会である以上、人間がその現実を直視したうえで是正し、よりよいものにしていくしかない。論語に学ぶ意味も、まさにその点にあると思う。

注

- 1) 「学而・為政・八佾・里仁・公冶長・雍也・述而・泰伯・子罕・郷党」篇までを上論、「顔淵・子路・憲問・衛霊公・季氏・陽貨・微子・子張・堯曰」篇までを下論に大別することがある。
- 2) 前漢時代に『魯論』『齊論』『古論』の三種が編まれた。前漢末期に張禹が魯論と齊論を比較整理して『張侯論』を編み、後漢末に鄭玄がそれを元に齊論と古論を参考にして定本を作り、注をつけた。魏になって、何晏が鄭玄の注した本を原本として『論語集解』を執筆した。今日に伝わる論語は、これによる。
- 3) 285年頃。博士王仁が来朝し、論語十巻を奉ったとの伝説がある。
- 4) 石本道明「日本人の論語(1)〔学而篇〕」『孔子全書月報第2号』p.1 明德出版社 平成12年4月10日
- 5) 竹内均解説『孔子 人間、どこまでおおきくなれるか』(渋沢栄一『論語』の読み方) 三笠書房 1992年。竹内均解説『孔子 人間、一生の心得』(渋沢栄一) 三笠書房 1993年など。
- 6) 吹野安「孔子の教育観」『孔子全書月報第1号』p.6 明德出版社 平成11年10月25日

- 7) 「特集 先達に学ぶ (対談「使命感に生きる」)『致知』10月号 通巻327号 p.17 致知出版社 2002年
- 8) 警視總監、野田健氏 (当時) が、東京都議会で東京の治安情勢について答弁したなかにあることば。2001年9月27日「平成13年第3回定例会 (第13号)」
[http://www2.gikai.metro.tokyo.jp/dsweb.exe/document!1!guest06!!3131!1!20,-1,20!2694!125021!](http://www2.gikai.metro.tokyo.jp/dsweb.exe/document!1!guest06!!3131!1!20,-1,20!2694!125021!20...)
 20... (平成15年1月27日付)
- 9) 元二松学舎大学学長、加藤常賢博士の定義。
- 10) 魅力を資源としてとらえ「さまざまな出会いをとおして魅力的な人間形成と人間関係を深める行動の学」と定義。個々人の持ち味を生かすことが要諦である。魅力行動とは「質・量・形・意味において魅力が付与された行動」をいい、人の行動に行動美学や、行動倫理を探り、身の回り30センチメートルからはじめる魅力行動の実践を提唱している。
- 11) 社会を「社会全体がえたいの知れない化け物のように見えていた」「不安定な社会の中で一人生きていく不安」「生き地獄」等と紹介している (「一人で生きる見えない明日」*Asahi Shimbun Weekly AERA* p.20～22 2003.1.13)。
- 12) 喪中の人と会食するときは満腹になるまで食べたりせず、弔問した日は歌わない (楽しいことは遠慮する) といった、人の悲しみを分かち合う思いやりに満ちた態度 (述而第七第九章「子食於有喪者之側、未嘗飽也。子於是日哭、則不歌。〔子、喪有る者の側に食すれば、未だ嘗て飽かざるなり。子、是の日に於て哭すれば、則ち歌はず。〕」吹野・石本『論語』による) など。
- 13) 何かと不品行をうわさされる南子に謁見したので、子路は悦ばなかった。孔子は、子路に言い訳している (雍也第六第二十六章「子見南子。子路不説。夫子矢之曰、予所否者、天厭之。天厭之。〔子、南子を見る。子路説ばず。夫子之に矢ひて曰はく、予が否なる所は、天之を厭たん、と。〕」吹野・石本『論語』による)。
- 14) 知と仁について質問する樊遲 (子遲) に、具体的に教授する (雍也第六第二〇章「樊遲問知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之。可謂知矣。問仁。曰、仁者先難而後獲。可謂仁矣。〔樊遲知を問ふ。子曰はく、民の義を務め、鬼神を敬して之を遠ざく。知と謂ふべし、と。仁を問ふ。曰はく、仁者は難きを先にして獲ることを後にす。仁と謂ふべし、と。〕」吹野・石本『論語』による) など。樊遲は勇者だが理解力に欠ける面があり、野菜の栽培法を尋ねるなど珍問が多い。
- 15) 孔子の教育方針は、学問、実行、誠実、信義にあるとされる (述而第七第二十四章「子以四教。文、行、忠、信。〔子、四を以て教ふ。文・行・忠・信。〕」吹野・石本『論語』による)。
- 16) 「子曰、民可使由之。不可使知之。〔子曰はく、民は之に由らしむべし。之を知らしむべからず、と。〕」 (泰伯第八第九章)。以上、吹野・石本『論語』による。「子曰、唯女子與小人為難養也。近之則不孫、遠之則怨。〔子曰わく、唯だ女子と小人とは養い難しと為す也。之れを近づければ則ち不孫、之れを遠ざければ則ち怨む。〕」 (陽貨第十七第二十五章)。以上、吉川『論語』による。
- 17) 礼を尽くして (規定の手続きを踏んで) 教えを求めて来た者に教えなかった (入門を拒んだ) ことは、一度もない (述而第七第七章「子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉。〔子曰はく、束脩を行ふ自り以上は、吾未だ嘗て誨ふること無くんばあらず、と。〕」吹野・石本『論語』による) や、厩が焼けたときのことだが、朝廷から退出した孔子が最初に問うたことばは「けが人はいなかったか」であり、(高価な) 馬の安否を聞くものではなかった (郷党第十第十二章「厩焚。子退朝、曰、傷人乎。不問馬。〔厩焚けたり。子朝より退く。曰はく、人を傷なへるか、と。馬を問はず。〕」吹野・石本『論語』による)、あるいは、あるのは教育 (による違い) であって、人間の種類 (生まれつきの類別) というものはない (衛靈公第十五第三十九章「子曰、有教無類。〔子曰わく、教え有りて類無し。〕」吉川『論語』による) などに、孔子の人間尊重や人間平等の考え方が示されている。

- 18) 婦人運動家、山川菊枝 (1890 ~ 1980)。社会主義者、山川均 (1880 ~ 1958) は夫。『武家の女性』昭和 18 年初版。
- 19) 山川菊枝『武家の女性』p.35 岩波書店 1983 年
- 20) 前掲書、p.36。
- 21) 同書、p.36・37。
- 22) 同書、p.35。
- 23) 杉本鉞子著・大岩美代訳 筑摩叢書 97 1967 年
- 24) 『武士の娘』の原題は“A Daughter of the Samurai”。著者は、自伝ではないので“The”としなかったと述べている。1923 年 12 月から 1924 年 12 月まで雑誌『アジア』に「武士の娘」と題する原稿が掲載された後、1925 年ダブルデー・ドーラン社から単行本として発行された。日本では、初版以降、明治百年を迎えた昭和 42 (1967) 年、筑摩書房から再出版されたほか文庫本も出ている。
- 25) 古閑博美「学び舎から」『円覚』246 号 円覚寺派宗務本所 平成 11 年 7 月 1 日。古閑博美「高度なコミュニケーションとしての礼儀・作法」『禮典』第三十五号 禮典研究會 平成 12 年など。
- 26) 憲問第十四第二十五章。吹野・石本『論語』による。
- 27) 学而第一第一章「子曰、學而時習之、不亦説乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不愠、不亦君子乎。」(「子曰はく、學んで時に之を習ふ。亦た説ばしからずや。朋有り遠方自り來たる。亦た樂しからずや。人知らずし愠らず。亦た君子ならずや、と。」吹野・石本『論語』による)。
- 28) 嘉悦大学では、学生支援としてアドバイザー制を導入。カウンセリング業務を充実させている大学は増えている。東洋大学、東京工業大学保健管理センターなど。
- 29) 里仁第四第十七章「子曰、見賢思齊焉、見不賢而内自省也。」(「子曰はく、賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては内に自ら省みる、と。」吹野・石本『論語』による)。

参考文献 (文中以外)

- 貝塚茂樹『論語』講談社 昭和 39 年
 貝塚茂樹訳注『論語』中公文庫 1973 年
 吉川幸次郎『論語 上』朝日新聞社 1996 年
 吉川幸次郎『論語 下』朝日新聞社 1996 年
 松枝茂夫+竹内好監修・久米旺生訳『中国の思想Ⅸ 論語』徳間書店 1996 年
 寺尾善雄『一冊でわかる! 論語』成美堂出版 1997 年
 宇野哲人『論語新釈』講談社 1980 年
 金谷治訳注『論語』岩波書店 1999 年
 狩野直禎『図解雑学 論語』ナツメ社 2001 年
 吹野安・石本道明『孔子全書 1 ~ 7 論語 (1 ~ 7)』明德社出版 平成 11 年 ~ 平成 14 年
 村山吉廣『MY 古典 論語のことば』(財) 斯文会 平成 14 年